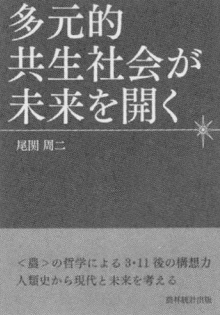




『多元的共生社会が 未来を開く』



尾関周二 著
農林統計出版社
2015年
A5判 174頁
2,000円+税

哲学者として、東京農工大学に籍を置き、農業と工業のありように思いを巡らしてきた本書の著者は、〈共生〉を人間—自然関係だけでなく、人間—人間関係をも包括する概念ととらえ、それをキイコンセプトに据えて、「多元的共生社会」を構想し、〈農の復権〉を強く訴えつつも、旧来の農本主義には与せず、来るべき脱工業化社会を「〈農〉を基礎とした農工共生社会」と銘打ち、その実現を高唱してやまない。小著ではあるが、熱のこもった力作といつてよからう。

著者は、「現代の哲学・思想はこれまで〈農〉の問題を取り上げ関心の対象とすることはほとんどなかった」と自己批判しつつ、〈農〉は近代文明のもとでは、三つの顔を持っているとし、伝統的農業としては「被害者」であり、工業的農業としては「加害者」でもあり、持続可能な環境保全型農業としては「近代文明を越えていく救済者」であって、近代以降の「工業化パラダイム」から環境保全を何よりも目標とする「持続可能な農業」の発現を基礎にする新社会への転換がなされなければならない、と力説している。このような〈農〉の復権の主張は、時には農本主義の見地との誤解を招きかねないが、決してそうではない。「工的活動」から「農的活動」への転換は、〈農〉への単純な復帰ではなく、「自然から離反した文明・文化ではなく、自然に即し自然のリズムを内在化した文明・文化」への転換であって、工業の在り方の「根本的転換」が必須の要件となる。

新しい〈農〉は、〈工〉の成果をステップにして

いかなければならない。端的に言えば、「自然環境に親和的な新たな工業」の創出が先決要件となる。もしも〈農〉の「復権」が工業社会の全面否定を意味するなら、それこそ正真正銘の「農本主義」の汚名に甘んじなければならなくなろう。

近代工業化社会の下で歪曲を余儀なくされた事態を脱却し、〈農〉と〈工〉の融合による「新しい産業化」へ歩を進めようとしているのに、あえて〈農の復権〉を謳わなくともよいのではないか、という異論も出よう。これに対し、著者は「農工共生化」を主張しつつも、〈農〉の復権が、背景に退く恐れを抱く。だが、著者も強調しているように、旧来の〈農〉に代わる〈新しい農〉は工業の所産をふまえた〈農工共生〉の所産であって、〈農の復権〉といっても、旧時代の工業化に代る〈農の復権〉でなく、「脱近代の〈共生〉は、前時代の共生と質が違う経験知のみならず、生態学を初めとする科学知識によって支えられる」所産、すなわち自然科学の諸成果によって面目を一新した「農工共生」の所産である。したがって、単純な〈農の復権〉ではない。

最後に、ひとつ気になったのは、著者が「科学・技術」を終始「科学技術」と表記し、両者を一概念と解している点である。「技術」の定義をめぐって戦前から論議が交わされてきたが、今日、大方の論者は「科学研究によって発見された自然法則の生産的实践における意識的適用」とする武谷三男説を支持しており、科学と技術との区別だけでなく、同じ自然科学にあっても、純粋科学と応用科学（技術学を含む）との相違を明らかにし、核兵器や原発を世に送り出した直接の責任は、応用科学者と技術者にあるとし、その責任を厳しく問うにいたっている。もともと、ラベッツのいうように、産業革命以後の科学・技術の「産業化」によって、科学・技術は資本に奉仕する「産業化科学」へと変貌を迫られ、科学者・技術者の責任も複雑な様相を呈するに至っているが、とはいえ、科学と技術との原理的区別を無視するのは単純化の誇りを免れなからう。

(北村 実：早稲田大学名誉教授・哲学・社会思想)